

# おわりに

2011年、バーンズ亀山静子先生に「最近のアメリカで注目すべきものって何？」と聞いたところ、「PBISだね。シカゴのホワイトリー小学校が成果を上げているよ」と言われました。これがPBIS（Positive Behavioral Interventions and Supports：ポジティブな行動介入と支援）を知るきっかけでした。

そして2012年、2013年とシカゴを訪問。特に2013年は、「ホワイトリーは前年度、シカゴ15学区のなかで最も子どもたちを伸ばした」と聞いていたので、期待して再訪しました。ところがそこで見た光景は、「これって学級崩壊？」というような光景でした。ホワイトリー小学校の中川優子先生曰く、「学校の評判を聞いて、年度当初いろいろな子どもが入学してくる。でも年度の終わりには子どもが変わる。本当は年に2回来てその差を見てもらえるといいんだけどねえ」とのことでした。「本当か？」と思ってよく見てみると、静かではないけれど子ども全員が「学びに集中」しているのです。「なるほど。この積み上げか」と思った瞬間でした。授業中、話をしないで背筋を伸ばしていればボーッとしていても評価される日本と、姿勢や学び方はどうであれ、しっかりと学ぶことが求められるホワイトリー小学校の差に驚きました。

その他にも、先生たちの子どもとかかわる姿勢や、ありとあらゆるものがデータ化され、そのデータに基づいて対策が協議され、教育活動が定期的に刷新されていく光景にもびっくりしました。データに基づいて教育を創造していく、それがPBISなのかと圧倒されたのを覚えています。

以来、バーンズ先生と中川先生には毎年広島で研修会を開いてもらっています。そうした中で日本でも少しずつ実践が広がってきました。今回の出版にあたり、私にPBISを紹介し、PBISを熟知するお二人に今後の日本のPBISの羅針盤となるような文章をお願いしました。

枝廣和憲先生、松山康成先生、渡邊悦子先生は一緒にシカゴやニューヨークに行ったメンバーで、私のゼミ生でもあります。滝川優先生、松本一郎先生、三宅理抄子先生、大西由美先生、佐藤博昭先生は私の知人で、庭山和貴先生、山下晴久先生、沖原総太先生は枝廣先生や松山先生の知人です。人の輪が広がるようにPBISの実践の輪も広がってきているということです。まだ「これがPBIS」といえる水準にまでは到達してはいませんが、日本の生徒指導に変革を起こす可能性を感じさせる、挑戦的な実践ばかりです。

本書が、生徒指導の新しい風を巻き起こすことを願っています。

2017年11月

栗原 慎二